
indifference

斉藤たかし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

i n d i f f e r e n c e

【Nコード】

N 4 7 6 2 P

【作者名】

斉藤たかし

【あらすじ】

ある普通の自衛官が、普通ではない最期を迎える。

うまく生きていくためには、無関心が重要。でも、ずっとそうやっていられるだろうか。いったい、何に関心を持てばいいんだろう。

それらと自分の間には、本当になんにも関係がないんだろうか。

第1話、第2話

i n d i f f e r e n c e

1

「・・・下田、下田！」

「下田班長被弾！下田班長が被弾した！」

「止血だ止血、馬鹿、もつと強く抑えろ」

「佐久、頭高いぞ下げる！」

夜寒の静寂を切り裂いて一発の銃声が鳴り響き、下田 3等陸曹が倒れた。彼に隣り合っていた隊員たちは下田の顔を覗き込み、胸の出血箇所を押さえつけた。しかし血はどくどくと傷口から流れ出し、下田3曹は目を剥いている。止血がなかなかうまくいかない。

2

うまくいかないのは、それが初めての経験だからだ。

佐久陸士長は呆然と、倒れた下田の横に立っていた。

「佐久！！聞こえてるのか、かがめよ！頭下げる！」

班の陸曹の一人が佐久の頭をひつつかみ、無理やりに地面に向かって押し付けた。敵の狙撃がある中で、普通の体勢でいることは自殺行為だ。しかし、呆然としていたのは佐久だけでなかった。

「馬鹿野郎、何ぼーっと見てんだ！撃ち返せ！・・・目標・前方の敵、連射、撃ち方始め！！！」

小隊長である浜野3尉の裂帛の号令で、佐久と同じように啞然としていた第1小隊の隊員達は、弾かれたようにそれぞれの89式小銃を構えなおした。安全装置の切り替え軸を「連発」を意味する「レ」にあわせ、遮蔽物となっているすこし盛り上がった地面から、敵のいると思しき方向にむかって頭を出す。敵は目視できない。暗いし、遠いし、敵は森の木々の中だ。隊員達は小銃を連射しはじめた。

それぞれの動作はどこかぎこちなく、遅い。訓練ではできたはずなのに、実戦ではパフォーマンズが目に見えて落ちていた。若い隊員は、顔に明らかに焦りが見える。

うまくいかないのは、それが初めての経験だからだ。

タタタタ、タタタと連射の銃声が辺りを満たす。30余名の小隊員たちはそれぞれ、見えない敵に対して射撃をしている。フルオートマチックではあるが、数発撃つごとに引き金を戻し、照準を修正してまた撃ち続ける。

ひとしきり隊員たちは連射を終えた。30発の弾倉を撃ちきると、隊員たちは弾倉替えを始めた。弾を使い切るタイミングがほとんど一緒だったために、一瞬の無音状態が訪れた。さっきまでの30余丁分の射撃音は凄まじく、それだけにこの静寂はインパクトが大きかった。突然訪れた静寂の中、隊員たちは互いに顔を見合わせた。

いかめしい戦闘服をまとい、重たい鉄帽をかぶった互いの顔は、不安に満ちていた。それがさらに互いを不安にさせた。隊員たちは黒や深緑のドーランで顔を迷彩柄に塗りたくっている。背景に溶け込むためだ。第1小隊の持ち場は、敵が潜伏している山の森を30メートル離れた場所から展望できる丘陵だった。森と丘陵の間に

は野原が広がっており、敵が山から脱出を図ることがあってもこのルートは選ばないはずだと思われていた。丸見えになってしまいうし、遮蔽物がなにもない。

弾倉を替え終わっても、誰も再び撃ち始めなかった。本来ならば「撃ち方やめ」の命令があるまで、撃ち続けなければならぬのに。その静かな空気を、浜野小隊長の落ち着いた声が通過した。

「・・・1小隊長から中隊長。山中の敵から狙撃あり、下田3曹が被弾して戦死。第1小隊はこれに反撃するも、敵からの再攻撃なし。送レ」

浜野は無表情に、早口で、無線通話をしていた。その言葉に、隊員たちは目を見張った。

戦死。

下田3曹の動かない体の周りに、数人の隊員がうなだれていた。辺りは今や静寂に包まれていた。彼が撃たれる前と同じ、完全な静寂。聞こえるのは隊員たちの少し荒い息遣いと、無線のノイズ。

『こちら中隊長。下田3曹が“戦死”したのか。送レ』

無線から、震えたような中隊長の声が聞こえる。

「1小隊長。下田3曹は戦死した。送レ」

浜野はあくまで冷静に返信した。

中隊長がわざわざ確認したのは、それが初めての経験だったから

だ。

佐久は、まだ下田の胸の傷のうえに手を当てていた。口元がぶるぶると震えている。

この日彼らは、自衛隊にとっての大きな歴史的瞬間を二つ体験した。ひとつは、自衛隊創設以来、初めて命令で敵に対して発砲したこと。もうひとつは、自衛隊創設以来、初めての戦死者を出したこと。

戦争映画なら、下田3曹は倒れたあとに苦しみの呻き声を上げながら、戦友の隊員に抱きかかえられるだろう。そして胸から家族の写真を出し、「妻と子供に、愛していると伝えてくれ・・・」などと最期の言葉を残してから、事切れるのだろう。

しかし実際には、胸に弾丸を受けた彼は、急激な失血のショックですぐに意識を失った。ほとんど即死だ。たとえ何か言葉を残せたとしても、小銃射撃の爆音の中、止血に必死な戦友の耳には届かなかっただろう。本当に死ぬときは、そんなものだった。

辺りは、静かだ。誰も声を発しない。呆然と、敵を警戒するのも忘れて、小隊の全員が動かぬ下田の体をみつめていた。

21歳の佐久弘樹陸士長は、下田が撃たれた時に彼の右隣にいた。そのとき、自分のたばこに火をつけたあと、下田3曹がくわえているたばこにも火をつけようと、ライターに火を灯した。それから数秒後に、銃声が鳴り響き、下田は倒れた。夜の闇の中では、たばこの火が数キロ先からでも見えるというのは教わっていた。

しかしもはや24時間を超えていた待機のせいで、気が緩んでい

ただ。自分と上官の些細なミスが上官自身の死を招いた。そして、上官の死の責任の半分は自分にあること、死ぬのは自分だったかもしれないこと、それらを理解するのに時間はかからなかった。

佐久は、次第に隊員たちの視線が自分に注がれるのを感じた。吐き気がする。

2

佐久士長は、もともと自衛隊に入るつもりはなかった。父親は広告製作の下請けをしている中規模企業の社員で母親はパートタイマーという一般的な家庭ではあるが、リーマン・ショック以降の不況は父親の会社を風前の灯火まで追い込んだ。私立大学には行かせられないからと言われ、佐久は国立大学を目指したが、失敗。合否の掲示を見たあと落ち込みながら駅に帰る道すがら、彼は本気で死ぬかと考えるくらいに落ち込んでいた。

目撃者いわく、死んだ魚の目。実際、そのときの顔はかなりひどかったらしい。それが証拠に、佐久少年はある灰色のビルの前で知らない中年男性に心配されて話しかけられたほどだ。その中年男性こそが、佐久が一年後に陸上自衛隊に入隊するまでいろいろと面倒をみてもらうことになる、大野2等陸曹だった。

「きみい、いい体してるね。自衛隊にこない？」

などと、自衛隊の入隊者を募って街中で声をかけることがままあった時代は、もはや昭和の昔だ。最近では自衛隊のイメージもすっかりよくなり、わざわざ街中であちこちつきに声をかけなくても自衛隊には入隊希望者が来る（そいつらが優秀かどうかは別だ）。

大野2曹も、佐久に声をかけたのは今にも死にそうな顔をしている彼を素直に心配してのことだった。大野はちょうど、用事をすませて自分の所属している「東京地方協力本部」の事務所の一つ佐久がとぼとぼと通り過ぎようとしていた灰色のビルの5階に帰ろうとしていたところだった。デスクに戻って自分のノルマを勘定し、お茶でも飲みながら昼休みを取ろうとしていたところ、ビルの前に魚が現れたというわけだ。

とりあえず彼を事務所に招きいれ、お茶を飲みながら話を聞くと、大学に落ちたから浪人するつもりなのだと言う。それなら・・・と、次年度の自衛隊の入隊試験という道を彼に提示した。本命の国立大学の受験の練習にもなるし、うけるだけ受けてみては、ということである。

一年後、努力の甲斐むなしく佐久は本命の国立大学に再び落ちた。大野に勧められた防衛大学にさえ落ちた。ただ、陸上自衛隊の入隊試験にだけは合格していた。もはや佐久は自分の頭の悪さと要領の悪さに愛想がつきていた。むしろすつきりである。これまであまり挫折を知らなかった彼は、努力してもどうにもならないことってあるじゃないか、と慣れない言い訳で自分を納得させる。

むしろ昔から頭よりも体を使うほうが得意だったと、さらに自分に言い聞かせた。確かに彼は、中学・高校ともに野球部で常にレギュラーメンバーだったし、体格も175cmの身長に65kgの体重と恵まれている。これはきっと神様のお告げだ。もしかしたら俺は自衛隊で一旗上げて、教科書に載るような大人物になるんじゃないか。まったくそうなりたくはないけれど。

佐久少年の両親は当初、息子が自衛官になることには不安を表した。ただし、もともと両親ともに自衛隊に対しては特にプラスのイ

メージを持っていない代わりに、マイナスのイメージも持っていなかった。悪く言えば無関心、すなわちたいいていの日本人が自衛隊に対して持っている感情を、彼らも持っていた。だから、大野2曹がわざわざ佐久家を訪れて熱心に自衛隊の“職業としての”美点をアピールすると、両親もそのうち納得した。むしろ、ほっとしていたようだった。まさか息子をもう一年浪人させる余裕は、この家庭には無かった。大野の人柄の良さを、両親はすっかり信用していた。万葉の桜も咲き誇る4月が、すぐに来た。

「弘樹、明日出発だね」

夕食を食べ終わって席を立とうとすると、母親が話しかけてきた。なんかわざとらしい。いつも俺たち、まともに会話なんてしないじゃないか。

「うん」

「がんばってね。辛かったら、電話してきていいから」
「うん」

気のない返事をして、佐久は改めて席を立った。うんざりする。というか、それだけか。息子が“軍隊”に入ろうとしているのに、別にいいけど。電話なんかしてやるものか。

ちなみに、父親は二日に一回ほどしか家に帰らない。今日も、家にはいない。

自分の部屋に戻ると、佐久は荷支度を再開した。送られてきた、入隊者向けの持ち物リストを再確認する。ジャージ、運動靴、下着類、洗面用具、裁縫セット、少量の現金・・・

こうして19歳の佐久少年は、桜咲く4月、釈然としない気持ちを抱えながらも陸上自衛隊に入隊し、「佐久2等陸士」と呼ばれる

ようになった。

本当にこれでいいのか。なにか騙されている気がする。大野さんはいい人だけど、こんなうまい話ってあるか。自衛隊に入れば免許もとれる、週休二日にボーナス、危険はほとんどない、やりがいのある仕事、なんて。なにか裏があるんじゃない。

ただとまあ、仕方ない。頭が悪いんだから。うちが貧乏なんだから。

続く

<参考までに>

陸上自衛隊 階級一覧

陸将	将官
陸将補	
-	-
-	-
-	-
1等陸佐	-
2等陸佐	-
3等陸佐	佐官
-	-
-	-
1等陸尉	-
2等陸尉	-
3等陸尉	尉官、ここより上が「幹部」と呼ばれる
-	-
-	-
-	-
准陸尉	-

第3話、第4話

3

佐久と、たまたま同じ時間に門前に到着した何人かの入隊者は、体格のいい自衛官に連れられて駐屯地の門をくぐった。先導する体格のいい自衛官は、検問所で立っている自衛官に敬礼をした。

「はい君たちも、お辞儀してお辞儀」

いわれるままに、入隊希望者たちは門の自衛官に向かって、ぎこちないお辞儀をした。それに門番の自衛官も、敬礼で返す。

「はいじゃあついできて」

めんどくさそうにそう言うと、今度は白い大きなブースの前へ。そしてブースの中の自衛官に対してまた敬礼をした。よくみると、ブースの中には銃を持った自衛官が見える。おお、さすが自衛隊。

「ここでもお辞儀して。ほらしっかり、中の人に向かって」

佐久たちがお辞儀をすると、ブースの中の人やはり敬礼で返す。どうもこれが、駐屯地に入るときの儀式らしい。佐久が下げている頭をすぐに戻すと、体格のいい自衛官は不機嫌な声を出した。

「ああだめだよ。相手の人が手を下ろしてから、頭を上げるの。こっちが敬礼してるんだから、相手が答礼を終えるまでやめちゃだめ。まあ、わかんねえか。これから教えるからな。じゃあ続行。・・・俺についてきて」

体格のいい自衛官は、早足でどんどん駐屯地の中へ歩いていった。この人たちは、たまにへんな言葉遣いをする。「続行」だの「前進」だの、「ひとまるさんまる」だの。日常に出てくるのだ。すなわち、これが彼らにとっての日常。

これからの俺たちにとっての、日常。

こうして、佐久2等陸士の自衛隊生活は始まった。

朝6時に起床してから夜10時の消灯まで、行動は厳しく制限され、携帯電話で友人に電話する時間さえなかった。訓練開始から最初の一週間で、数人が脱落した。彼らははじめに駐屯地に入るときに着ていたのと同じ私服に着替え、営門を出た。

訓練は基本的に朝8時から夕方5時まで・・・自衛隊風に言えば、0800（まるはちまるまる）から1700（ひとななまるまる）までだ。

「・・・俺、次の休暇でここを出てく」

ある日、佐久と同じ106居室のメンバーである木場は、課業が終わり居室に戻ると、そうはき捨てた。

「もううんざりだ。なんでちょっとズボンにシワがあるくらいで、腕立て50回なんだよ」

「出てく出てくって、何回目だあ?」

佐久が半長靴はんちょうつがの紐を緩めながらちゃかす。木場は毎日のように自衛隊をやめると宣言している。

「いや、今回はほんとにやめるね。もともと俺は自衛隊なんて入りたくなかったんだ」

木場はそういいながら、ベッドのマットレスに倒れこんだ。布団やシーツはたたんである。これを夜9時すぎの清掃の時間までに、決められた手順でベッドメイクしなければならぬ。

「こんな理不尽な話があるかよ・・・プレス苦手だしよお」

「だから、俺が教えてやっただろ。お前は力を入れすぎなんだよ」

なんでも器用にこなす本村が言った。本村は大卒だ。高卒がほとんどを占める2等陸士たちにとって、少し年上の兄的存在である。しかし歳が違うとはいえ、同じ年に自衛隊に入れば同期。みんなタメグチでしゃべりあう。

「力をいれすぎず、折り目をまずしっかり決めてだな・・・」

「わかってるって!」

ほぼヤケになった木場が、脱いだ半長靴を乱暴に地面に投げ出した。

「どんまい木場2士。あと半年もこの教育隊にいれば、お前でもきつとプレスうまくなるさ」

佐久がそういうと、木場はウルセエとうめき声を上げた。本当は2士たちが教育隊にいるのは入隊からの三ヶ月間だけだし、それもすでに一カ月が経過している。

「ああーもうやだ」

木場はマットレスに沈み込んだ。

佐久は半長靴をベッド下に綺麗に置き、運動靴に履き替えた。硬い半長靴から開放された足が心地よい。迷彩ズボンを脱ぎジャージに履き替えながら、佐久は木場を見て、次に隣のベッドの浅羽2士に目を移した。

・・・木場はちょっと不器用なところはあるが、他人に迷惑をかけたまいとがんばるし、なによりテンションが高くておもしろいやつだ。こいつがいると場が明るくなる気がする。だが浅羽、こいつは・・・。

佐久は、浅羽の小柄な体を見た。異様に華奢で、メガネをかけた顔は冴えない。どうみてもこいつは彼女いない歴〃年齢だ。しかもベッドメイクは遅いわ、足は遅いわ、銃の分解結合ですぐ部品を落とすので班の全員が腕立てを命じられる。よくこいつのいないところで、班員は浅羽の陰口を言っている。

だから、浅羽だけ班で仲間はずれにされることも多い。最初は気づいていなかったようだが、さすがに一ヶ月目ともなれば気づきはじめているようだ。もともとのあほ面が、今は死んだ魚の目になっている。

・・・死んだ魚のような目。

そういえば自分も、浪人時代に大野さんにいわれたっけ。あのときの君は死んだ魚のような目をしていたよって。自信が全て打ち砕かれ、友人はみんな大学に行ってしまった、ひとりぼっちな上に希望もない状態。

佐久は、急いで頭を振った。あれはもう昔の話だ。今の俺は佐久2等陸士。仲間だっているしこの自衛隊でそこそこうまくやってい

る。

一瞬、佐久は浅羽に同情しかけていたことに気づいた。それはまずい。ハブられているやつに同情したっていいことはない。ここは無関心に限る。こいつも、耐えられないようなら辞めて家に帰るだろう。俺が同情したって何もできないし。

「ほらっ！メシとフロいくぞ！」

佐久は風呂道具を持ち、木場のベッドまで歩いていくと、足を蹴つ飛ばした。木場は素っ頓狂な悲鳴を上げた。

それから三週間後のある日の朝礼で、浅羽2士が怪我により退職するという旨のことが告げられた。しかし、ほとんど全員が真相を知っていた。数日前の夜、浅羽は洗面所で手首を真つ赤に染めた状態で、おまけにかなり錯乱した状態で、同期の一人に発見された。ひげそりの刃を使って手首を切ったようで、いわゆるリストカットだ。そんな精神状態の隊員に訓練を強いるわけにもいかず、区隊の要員たちは、浅羽を退職させることに決めたのだった。

午前中の訓練の休み時間中、本村2士が言った。

「あいつは相当参ってた。もともと自衛隊向きじゃなかったんだ」

班の全員が、それを聞いて何をいまさらという顔をした。本村は困ったように顔を伏せた。本村は、どうやら浅羽の相談相手になっていたらしい。そういえば最近妙に浅羽を会話の輪の中にいれようとしていた。そのたびに空気が微妙になり、みないやな顔をした。その結果、その本村自身も時々みないやな顔をされるようになっていた。現にいまだって、変な空気になったじゃないか。

「気にしない気にしない！去るものは追わずだぜ」

木場がそんな空気を振り払うかのように、おどけた声を出した。場の空気が少し和む。

「じゃ、俺もお前がやめるとき追わないことにするわ」

佐久がちゃかすと、やっと班員に笑いが戻った。

「さよなら木場2土！」「いいやつだったな・・・」「惜しいやつをなくしたわ」

班員が口々に乗ってくる。こういうノリが大事。これができないやつはハブられるし、そんなやつをかばう必要はないんだ。無関心でいて結構。

本村だけ、笑っていないかった。

4

浜野3尉は、すぐに小隊の全員にタバコを禁じた。あえて佐久士長に声をかける者はいなかった。浜野は、佐久を咎めることさえしなかった。

小隊は落ち着きを取り戻した。持ち回りで敵の方向を夜通し監視し、他の者は仮眠を取ることになっていたが、誰も眠ってはいなかった。張り詰めたような緊張が辺りを覆っていた。

数分後、第1小隊の持ち場に中隊の車両が到着した。乗っているのは、中隊長とその補佐の幹部、そして数人の陸曹。浜野小隊長は、

敬礼で迎えた。

彼らは、下田3曹の遺体を受け取りに来たのだった。

佐久は一人、小銃を抱きかかえながら座り込んでいた。何をす
わけてもなく、ぼおつと考えていた。どうしてこうなったんだ。自
分だってタバコの火がやばいくらい知ってた。だけど下田3曹が先
にタバコを取り出したんだ。だから別にいいんだと思うじゃないか。
誰かに声をかけて欲しかった。だけど、誰も声をかけてはくれな
い。無関心だった。ああそっういえば昔、自分も同じことを・・・

「佐久」

後ろから蹴つ飛ばされて、佐久は前につんのめった。

続く

第5話、第6話

5

班長の号令が響き渡る。

「連続歩調ー！ー！！」

戦闘服姿に銃を抱えた新隊員たちは二列縦隊を組み、リズムカルに歩調を合わせながら隊舎までの道を走っていた。

「ホチヨー、ホチヨー、ホチヨー、数え！」

『イチ』

「そーれ！」

『二』

「そーれ！」

『サン』

「そーれ！」

『シ』

「そーれ！」

『イチ』 「オイ！」 『二』 「オイ！」 『サン』 「オイ！」 『シ』 「

オイ！」

『イチ、二、サン、シー、イチ、二、サン、シ！』

新隊員たちは声を合わせて、歩調を数える。声の大きさが班長のお気に召さなければ、この4kgを超える銃を持ったまま、往復数が増えてしまう。既にグラウンドと隊舎の間を3往復している新隊員たちの中から、早くも脱落者が出始めていた。

「おらー！小山でめーもうへばったのか！」

落伍者は隊列から外れ、少しずつ取り残されていく。

「中谷、お前バディだろ！小山の銃を持ってやらんか！」

新隊員たちは二人一組のバディを組んでいる。訓練中はもとより、新隊員教育期間中は常に行動を共にする相棒だ。体の小さい小山2士に、64式小銃の重さはこたえる。しかしバディの中谷2士も決していいガタイをしているとはいいいがたい。二人とも虫の息だ。

一方、佐久2士のバディは木場2士。木場は高校卒業後すぐ入隊しただけあって、部活で培った体力がある。佐久と同じく、高校では野球部に所属していたのだ。

「ひゃー、あそこの、二人は、大変だねえ」

木場は息をぜいぜい言わせながらも、まだ余裕がある声を出す。

「ほんと、だな、これ多分、あと3往復はするぜ？」

佐久もまだある程度余裕がある。この区隊では二人とも、持久力はあるほうだ。銃を持ち、固い半長靴を履いても十分走れる。

第1班の班長である下田3等陸曹が、小山の横にぴったりついて怒鳴り声をあげていた。

「小山ー！がんばれ、力を振り絞れー！そんなんで敵を倒せるかー！中谷、お前もへばってるのかー！」

中谷も、小山の横につきながらせいぜいと苦しそうな呼吸をしている。とてもバディの銃を持ってやる余裕なんてあるようには見えない。こりや落伍者を出した連帯責任で、全員腕立て100回か・?と、区隊の誰もが思ったそのとき。

すつと誰かの迷彩服の腕が伸び、小山2士の銃を奪い取った。

「がんばれ小山2士！あんまり鉄帽を揺らすな」

腕と声の主は、成嶋2士だった。成嶋は、自分の銃と小山の銃を両手にもちながら、前を走りながら励ましの声をかけ続ける。下田班長の、成嶋を褒める声が聞こえた。成嶋はアドバイスと励ましの声を送り続けている。

「おおー、成嶋さん、がんばるねえ！バディでもないやつ、銃を持って走るとか！」

木場は嬉しそうな顔で、賞賛とも揶揄ともとれぬ声を上げた。素直なこいつのことだから、きっと前者だろうが。一方、佐久の笑顔は多分に後者を含んでいた。

「へえ、成嶋がねえ・・・めんどーみがいいこと」

佐久はどうも、あの男が気に入らなかった。無関心主義の佐久は、おせっかいが嫌いだ。

軍隊神話、というのだろうか。駐屯地の中では、しょうもないよつな噂が飛び交う。どここの倉庫の前では幽霊が出るのだといった話から、中隊の古参陸曹の恐ろしい武勇伝。よくよく考えれば明らかに誇張を含んでいるのに、駐屯地の中にすし詰めで特に娯楽の

ない隊員たちの間ではそういった噂が一気に広まる。広まることに、尾ひれがついてまことしゃかにささやかれる。そして誰しもそれを楽しんでいるのだ。

成嶋 2 土も、そんな神話の登場人物だった。若い新隊員たちの間で目立つ、明らかに一人老けた顔立ち。26 歳までの受験資格ぎりぎりなのではないかと思われた。そして顔が怖い。新隊員は髪を短く切られるが、その結果情けなくなってしまいう優男もいれば、気迫が増す者もいる。成嶋は圧倒的に気迫が増すタイプだ。体格もいい。そしてなにより他の新隊員たちを恐れさせたのは、成嶋の過去に関する噂だ。

元・歌舞伎町のヤの人で、人を殺したこともある。それで娑婆にいづらくなつたから、自衛隊に来たのだと。

ちなみに、佐久はこの出来の悪い噂を全く信じていなかった。歌舞伎町つてのが安易すぎるだろ。それに犯罪歴のあるやつが入隊できるか? というかなによりも、二週間前に聞いたときは成嶋は「元暴走族のリーダー」で、そのさらに前はただの「ヤンキーあがり」だっただろ……。

「いや、そういう人ほど情に厚いんだって」

その夜。木場は居室で力説する。さすがに居室のメンバーは呆れ顔だ。木場は単純に楽しんでいるに違いない。

「ヤの字も自衛隊も、ようは男の体育会系社会だろ? 通じるもんがあるんだよお」

「お前、まさか……」

山下がニヤニヤしながら尋ねた。

「お前が噂の発信源じゃないの？」

「ちがうわ！」

木場はわざと驚いたような顔をしてみせた。

「俺は2班の須田から聞いたの！まじで」

「おーい木場、アイロンおわったぞー」

佐久はプレスがけをしながら、ただ木場の話を聞き流していたのだ。
った。

「佐久う、どう思うよ？」

木場はとにかく噂話をして、その反応を見るのが好きらしい。

「いいと思う。山ちゃん、靴磨き行こうぜ」

佐久はなお無駄話を続けようとする木場に適当に返事を打ち、木場のふくれつらを横目に、半長靴を掴んで山下といっしょに居室を出た。廊下の途中にある中ホールと呼ばれる踊り場で靴磨き用のクリームと布を取り、舎側に出ようとしたところで、山下の腹がごろごろと鳴った。

「やべえ・・・腹、腹に来た」

「えっ」

「先行っててくれ！」

山下はトイレに向かって駆け出す・・・訂正、隊舎の中を走ると怒

られるので、できうる限りの早歩きでトイレ方向へ前進。夕食の食材のうち何かに当たったからなのか、それとも食後に班長たちにはれないようにやったアイスじゃんけんで勝利し、班員全員から売店の100円アイスを搾取して一気にそれを平らげたからなのか、原因は不明としておく。しかたなく佐久は、靴磨きをするべく一人で舎側へ前進。隊舎の側面は喫煙所にもなっていて、佐久たちの中隊はそこで靴磨きをすることになっていた。

金属製の重いドアをあけると、外の涼しい風が全身に当たる。5月半ば、日中の気温は例年よりもだいぶ高いが、夕方を過ぎるとまだだいぶ涼しい。しかしドアを開けた先は喫煙所、涼しい風を追ったタバコの煙が佐久の顔にあたった。喫煙所には先客がいた。

そこにいたのは、とんでもない噂が絶賛流布中の、成嶋2士だった。

その他には、誰もいない。成嶋は煙缶（エンカン、つまりは吸殻入れの缶）の横に立ち、一人でタバコを吸っているのだった。

まずい。これはまずい。元暴走族のリーダー、いやヤーさん？そんな素性不明の超強面の年上と、二人きりという状況である。成嶋は佐久と同じく、迷彩服の上着に下はジャージと運動靴、課業終了後の自衛官の一般的な服装だ。顔はしかめつら、右手にタバコ。とにかく山下、早く来てくれ！

「お疲れ」

呆然と立ち尽くす佐久に、先に声をかけたのは成嶋だった。

「あ……お疲れ様です」

自然と出てくる敬語。同じく年上の大卒2土の本村にはタメグチで話せるが、この人の前では無理である。立ち尽くしているのもなんなので、しかたなく佐久は半長靴を片手にぶらさげ、コンクリートの舗装と土の境目付近に腰を下ろす。成嶋に背を向ける格好だ。ここは黙々と靴磨きをして、山下が来るのを待とう。こういう人には無関心、無関心。

この人と話したことは、まだ一度もない。佐久がブラシを手に取り靴磨きを始めると、後ろからまたも成嶋が声をかけてきた。

「佐久2土は、タバコは吸わないのか？」

う、この人、俺の名前を知っている。

「す、吸わないです……。僕の名前、知ってるんですか？」

「ああ。君と木場2土、いつも活躍してるじゃないか。持続走にする、銃剣道にしる。知ってるよ」

これは……。目をつけられているということだろうか。佐久は冷や冷やしながら、言葉を搜して靴にブラシをかけ続ける。成嶋は言葉が続けた。

「最近の高校生とか大学生は、あんまりタバコを吸わないよな」

「あ、はい……。人によるんじゃないでしょうか……。あと僕未成年です」

たしかに佐久は、タバコを吸わない。高校時代は野球部にわりと本気で打ち込んでいたし、タバコ騒ぎで大会出場停止なんてさらに聞く話だったので、佐久はタバコには手を出さなかった。

「まあそうだよな。俺の高校時代なんて、俺も含めて頭悪いやつばっかだったから、みいんなタバコやっては補導されてたぜ」

成嶋の言葉に、佐久は少しむっとした。「俺も含めて頭悪いやつばかり」？だからこいつは自衛隊にいるんだろつか。ということとは、俺は頭が悪いから自衛隊に入ったことになるじゃないか。大学受験の失敗が、頭をよぎった。

佐久が黙っていると、成嶋は少し間を置いて、言葉を続けた。

「一本吸ってみるか？」

佐久は振り向いた。成嶋はいつの間にか佐久のすぐ後ろに立っていて、タバコが一本だけ飛び出した箱を佐久のほうへ向けていた。ケースに書かれていたのは「Seven Stars」。

「・・・いただきます」

佐久は自分でもわからないうちに、その一本を抜き取っていた。

「少し吸い込みながら火いつけるんだぞ」

成嶋はライターを、佐久がくわえたタバコの先にあてながらそういつた。

タバコの先に火がつくと、口の中に苦い煙が広がった。マズい。だが佐久は別に咳き込むわけでもなく、ゆっくりと煙を肺にいれろと、吐き出した。

タバコを吸いながら、佐久は成嶋の話聞いた。成嶋は24歳。高校を出てからはフリーターとなりこの歳まで遊び暮らしてきたが、もう歳も歳だしいつまでも遊んでるわけにはいかない。だが、学歴も無く資格も持っていない成嶋に、ましてこの不景気のご時世、就職口などあるはずもない。選んだ先は自衛隊だった。

「結局、俺は親父と一緒に・・・まあ、似たような道を選んじまったのさ」

自虐の入った口調でそういった。

「親父は幹部自衛官だ。今でも現役さ。俺が餓鬼のころから、全国転勤で単身赴任。おかげかどうか知らんが俺はヤサグレちまった。結局はこうやって自衛隊にいるんだけどな！」

成嶋はフィルター近くまで吸い終わったタバコを煙缶に投げ入れた。

「吸ってるタバコも気づきや親父といっしょの銘柄だ。佐久くん、子供の教育は間違えちゃいかんぜ」

そういって、自虐的に笑った。だが、不思議と卑屈な印象は感じなかった。

「さあてと、ベッドをやっちまわなきゃ」

成嶋は、そういって煙缶の横に置いてあった自分の半長靴を掴んで、隊舎のドアを開けた。

「話し聞いてくれてありがとな」

振り向きざまにそういうと、成嶋は隊舎の中へ入っていった。ドアが閉まらないうちに、木場の上ずった「お疲れ様です！」という声と、成嶋の「お疲れ」という声が聞こえた。

すぐドアが再び開き、半長靴を片手に木場が入ってくる。木場は佐久を見つけると、木場が一人なことに気づいた。

「あれ？山ちゃんは？」

「・・・あー、なんか腹壊したらしい」

「ははん、アイスのバチだ！・・・というか、今、成嶋2士とすれ違ったけど、お前さつきまで二人きりだったの？」

木場は興味津々な顔で訪ねる。

「なあ、なんか話したのか？成嶋さんと！・・・お前、タバコ吸ってたっけ」

佐久の指には、フィルターのところまで燃え尽きたタバコが握られていた。

6

11月の空気は、涼しく澄んでいる。敵方を警戒する隊員たちの衣擦れの音が聞こえる。

ぼんやりとかがんでいた佐久士長は、後ろから蹴っ飛ばされて地面に手をついた。

誰かと振り向く。

木場士長だ。

「佐久」

木場は、静かにつぶやいた。89式小銃を右肩にかけ、ドローンが塗りたくられた顔は暗闇の中でほとんど真っ黒に見える。

佐久は立ち上がって、木場に正対した。蹴られた怒りで、木場をにらみつける。

しかし、木場の目を見て佐久ははっとした。木場は、真剣な眼差しで佐久を真っ直ぐに見つめている。

教育隊からの仲だ、目を見れば何を考えているか分かる……とまでは言わない。だが、何か言いたげなのは伝わってくる。

「なんだよ」

自分の声が震えていないか、佐久は自信が無かったが、どうやら大丈夫だ。

「……いや、もうすぐ交代の時間だからよ、寝ちまってるのかと思っただぜ」

「お前といっしょにするな」

ふっと、二人同時に笑った。二人同時に思い出したからだ。去年の演習の時、佐久はさつきと全く同じ方法で、座ったまま眠りこけていた木場を起こしたのだった。

二人はそれ以上、何も言わなかった。佐久は交代のため、持ち場

へと歩き始めた。

木場は、その場に立ったまま佐久の背中を見送る。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4762p/>

indifference

2010年12月25日18時07分発行